

第17回定例研究会（春季特別大会）報告

ラウンドテーブル 「震災と舞踊」

日時：2012年6月3日（日） 16：00～18：00

会場：立命館大学 志学館123

オーガナイザー（兼スピーカー）

村田 芳子（筑波大学）

スピーカー

弓削田綾乃（早稲田大学）

砂連尾 理（舞踊家）

栗谷 佳司（立命館大学）

《テーマ設定の趣旨》

昨年3月に東北・関東を襲った東日本大震災は、各地に甚大な被害をもたらし、多くの尊い命を奪うとともに、日本中がかつて経験したことのない大きな試練に直面した。誰もが「自分にできることは何か」を考え、その「思いをカタチに」した復興への支援は、世界中に広がっていった。

こうした中で、ダンスが今社会で果たすべき役割とは何かを考え、ダンスが被災地人々の心と体を癒し、人と人をつないで内から元気にする大きな力を持つことを感じてきた。

震災から1年以上が経過した現在も、「3.11の記憶」は色褪せることなく、震災は、大きな痛みと引き換えに、我々にそれぞれの原点に立ち返る問いを投げかけ、「現実から学ぶ」ことの重さを実感として教えてくれたことの意味は大きい。

震災以後、様々な場面で震災をテーマにしたシンポジウムや研究会が開催されてきているが、今回は、舞踊学会として「震災と舞踊」をテーマに取り上げ、「今ダンスに何ができるのか」、「ダンスだからできることは何か」について考えていく機会としたい。その多面的なアプローチとして、4名のスピーカーから話題を提供していただき、ラウンドテーブルという形式で参加者と議論を深めていきたい。

最初の弓削田氏からは、原発事故の被災地・福島の子どもの対象としたダンスワークショップの実践と地域行政の動きを、続いて、砂連尾氏からは、舞踊家の立場から仙台での幅広いダンス活動とメディアの可能性を、次の栗谷氏からは、音楽という立場から阪神淡路大震災と今回の東日本大震災における音楽とメディアの可能性についての研究を、最後に、村田からは、被災した茨城と筑波大学の状況と大学から発信した様々な支援活動におけるダンスの可能性について報告する。

そのあと、4名の話題提供を基にフロアの皆さんとの質疑と議論のやり取りをしていく。

1. 舞踊と支援活動を考えるー原発事故を受けた地域行政からみえてくるものー

弓削田 綾乃（早稲田大学）

私は、昨年7・8月と10月、福島県郡山市に行つて子どもたちとダンスを一緒に行うという経験をした（第63回舞踊学会大会研究発表「福島県郡山市の林間学校におけるダンス活動の意義と課題」）。

それを主催したのが行政だったので、行政の事業を通して被災地でどのようなことが求められているのか、そしてそれに対して舞踊がどのように応えていけるのかについてお話ししたいと思う。

当時、市内の小学校では、屋外活動を3時間以内とする「3時間ルール」が存在していた。これは、大気中の放射能を恐れての措置であり、東京電力福島第2原子力発電所の事故は、外で自由に遊びまわる機会を子どもたちから奪ってしまっていた。このルールは2012年4月に解除されたものの、保護者の不安は、いまだ消えていない。また、幼稚園・保育所での屋外活動については、さらに厳しい「30分」とされ、2012年5月現在、まだ解除されていない。

その中で、たった数回ではあるが、ダンスを通じた子どもと保護者たちとの出会いは、私に多くのことを考えさせた。とりわけ強く感じたのは、子どもたち同様、あるいはそれ以上に、保護者の方々が大きなストレスを抱え込んでいることへの危惧だった。

こうした現状に対して、郡山市は、子どもの心と体の育成事業をいち早く開始し、独自の様々な取り組みを展開してきた。今回紹介するキッズダンス教室も、この一環であった。いずれも行政主導ではあるものの、地域住民の協力体制のもとで行われ、「子どもたちの成長を助けたい」という意識の高さが感じられた。

私が参加したのは、児童、保護者を対象として7月と8月に開催されたものであり、次に、幼稚園児とその保護者、家族を対象としたものが10月に行われた。様々なプログラムが組まれている中で60分～90分のダンス教室を担当したが、このプロジェクトに「ダンスで笑顔と元気を」と名付け活動を進めた。子どもたちよりも、大人の方が表情も体も非常に硬いという感じだったが、ダンスを通して表情が和らぎ、優しいコミュニケーションに変わっていく様子を見ることができた。最後の発表では、お父さんもお母さんも一緒に踊り、特に、お父さんが前面に出てやってくれたことが、とても印象に残っている。

もう1つは小学校低学年のグループの教室である。前半みんな緊張していたので、緊張をほぐすための表現遊びやリズム遊び、手をつないだり、電車ごっこや抱き合ったりという時間を多く取っ

た。ダンスを体験することを通じて、心身の解放、自己の肯定、他者の受容、リラックス、自立といったことが実際にできたのではないかと考える。

行政の取り組みとしての舞踊の支援活動の広がりについて、郡山市の課題として「屋内活動の充実化」「日常生活への支援」「単発的支援よりも長期的・継続的支援」の3つが挙げられる。実はいま見ていただいたダンス教室は、最初は「何でもいいから、子どもが元気になれるような屋内運動をやってくれ」と言われて始め、実際にやってみると、参加者みんなの表情や態度が変わった。それを見て、行政の方々が「ダンスの力ってすごいじゃないか」ということになった。このようにして継続的な支援が生まれていくのではないかと思う。今後もダンス活動やダンス支援をすることが決まっており、計画が進んでいるところである。

2. ダウン症男性とダンサーの事例から、被災地におけるアートの可能性を考える 砂連尾 理 (舞踊家)

私は昨年9月、12月、そして今年の3月の計3回、仙台を訪れ、ワークショップを行った。仙台は、作品制作で滞在した2003年以来、ほぼ毎年のように訪れる、私にとってとても縁の深い町である。

ARC>T (Art Revival Connection TOHOKU, 通称: アルクト) というNPO団体があるが、これは震災後に仙台や東北において、これから舞台芸術に関わる人間が何をしたいかということで立ち上げた団体である。私が2003年にワークショップをやったときのワークショップ生が運営している。それから3回、ARC>Tを通してワークショップをする機会を得て、2011年の9月、12月と、今年の3月に開催した。

そのワークショップでは、2007年のみやぎダンスがきっかけで知り合ったダウン症の2人にアシスタントに入ってもらった。それは、今回の震災で大変なショックを受けていた彼等に寄り添い、接する時間を少しでも作れたらという思いからであり、「僕が今できることは一体何だろうか」と考えた時、私がアーティストとして活動していく中で「ちゃんと舞台と社会をつなげて考えていくため」である。

行ってみて一番感じたことは、仙台の中心部は大きな被害は受けていないが、「自分の子どもは半年間ずっと家に引きこもっている。もう私の横でしか寝られない状態が続いている。だけど海岸部に比べたらましなのよね」と言う。次に海岸部の人に話を聞くと、「いや、私はまだ家を流されてないから、それに比べたら大丈夫なんです」と。家を流された人は「亡くなってないから」というレイヤーがある。そういう中で、目に見え

る、あるいはメディアが取り上げている場所以外に、大きな傷がいっぱいあるということである。

その中で、3回のワークショップをやった。ダウン症の彼らは普通にコミュニケーションできない。ではなぜ彼らをワークショップのアシスタントにしたかということ、戦後、経済効率中心で進んできたこの社会の中で、効率的じゃないものをワークショップを通して体験してもらおう。そのことを生活の中に取り戻していかないと、結局は便利な方に走っていくことになるんじゃないかと。ワークショップに参加している人たちも被災者である。1人が「ふるさと」をハーモニカで吹き出すとみんな泣き出すような状況の人たちである。でも彼らがワークショップのアシスタントや参加者であるという状況の中から、生活を考え直して行きたいと考えたからである。

3回のワークショップを振り返ると、彼等との関わりがコミュニケーションの在り方について色々と考えさせられるきっかけとなり、むしろ力をもらえているのは私や他のワークショップ参加者の方だなと感じている。

仙台での活動とは別に、彼等に私が関わっている別の土地でのプロジェクトやこの2月に奈良で行われた芸術祭にそれぞれ参加してもらい、一緒に即興パフォーマンスを行った。さらに、そういったダンスの活動と平行して、仙台メディアテークが行っている“3月11日を忘れないためにセンター”のメンバー登録を行い、特に震災以降の生活について、二人のうち一方の男性と、その母親へのインタビューを記録し、インターネットを通して彼らの声を届け、また後世に伝える為の活動を行っている。

これらの活動が震災後の彼等の心の回復にどれほどの効果が出ているのかは詳しく調べていないので分からない。ただ、こういった状況で、私のような外部の者がダンスやパフォーマンスを通して被災地の被災者と繋がり関わることに、何らかの可能性があるのでないかと感じている。そして、こういった活動を、癒しや絆といったマスメディアが流布している言葉に簡単に回収されることなく、その意義や意味を皆さんと共に考え、議論できたらと思う。

先月から始めている活動として、閉上(名取市)という津波の被害が大きかった所で講演とワークショップをした経験があり、そこで避難所生活をしてきた人たちの声を集める計画を進めている。それを11月か10月にパフォーマンスという形にして、1年に1回、この津波と震災のことを忘れないためのパフォーマンスをしようと考えている。

それで、もう一度ダンスというものを通して、何か目に見えないものに対する畏敬の念というものを取り戻していけるならば、ダンスのワーク

シヨップ参加者や被災した直後の人たち以外の人に対しても、表現という形で何かできるのではないかと考えている。

3. 震災後の音楽空間について

粟谷 佳司 (立命館大学)

本報告では、東日本大震災後のいくつかの音楽に関するイベントやメディアの反応から、音楽の持つ力について、阪神淡路大震災後における音楽イベントの実践も踏まえながら考える。

阪神淡路大震災後に神戸長田神社で行われたイベント「つづら折りの宴」では、主に地元のボランティア団体が発行していたミニコミや主催したミュージシャンのネットワークによって演奏者や参加者が集まっていた。そして、長田神社という場所に集うことによって、主催者と参加者は音楽を媒介とした人々をつなげる空間を形成していたのである。

私は、「何かが起こる」「人々が集まって何か行為を行う」場所の問題について興味を持っている。そのパフォーマンスをする空間がどのようなものであるのかについて、メディアとか、いろいろなところから考えてみるという研究を行っている。その中で、震災復興におけるコミュニティFMと空間の問題について分析を行った。分析では、震災後にミュージシャンたちが中心になって行なった「つづら折りの宴」というイベントや、「エフエムわいわい (FMわいわい)」という放送局を取り上げた。この放送局は、震災後すぐに地元の人たちによって、神戸の長田で、まずは違法な放送として始まった。今はNPO (特定非営利活動法人) になっています。) FMの役割とは、当初、震災の後の揺れがどうか、いわゆる衣食住の基本的なライフラインを伝えるというところから始まったが、話を聞いてみると、衣食住が与えられると、その次に私たちが必要になるのは娯楽である。そこで娯楽としていろんな催しがある中でも、特に音楽の役割について分析した。

東日本大震災においては、インターネットやウェブ空間による音楽の働きが注目されている。例えば、震災後すぐに福島出身者のミュージシャン、クリエイターなどによって結成された「猪苗代湖ズ」は、3月17日から20日のわずか3日で曲をレコーディングしてそれをネットで配信している。また、ユーストリームによってライブを配信しているサイト、ドミューンプロジェクトFUKUSHIMAに賛同し、ドミューンフクシマとして地元のFM局からドミューンのライブストリーミングとFM放送との二元公開生中継により放送している。

このように、素人でもビデオカメラがあれば、

簡単に全世界に向けて音楽、映像、パフォーマンスなどを配信することができる。こういう流れが、震災後すぐに起こったのである。1995年の阪神淡路大震災の頃は、インターネットがまだまだ普及していなかったが、いまはインターネットの書き込みとかでオーディエンスの声が明らかになってきている。ネットの広がり、この5年ぐらいで非常に大きくなってきている。このように、音楽や映像をウェブ空間に配信することにより、それらが全世界へ支援の輪を広げているのである。ここでも、ウェブ空間を媒介にしているが人々をつなげる空間が形作られていたのである。

ここまでウェブ空間を媒介にして、人々がつながる空間があると提起してきたが、もう1つ考えたいのは、音楽空間が構築される時や人々が動員される時に、情報メディアは重要な役割を果たしているということである。

音楽の役割については、「日経エンタテインメント!」2011年6月号に掲載された、全国の主要なFM局のラジオDJが震災後にポジティブになれる曲を選んだリストによれば、J-POPに限らず様々なジャンルの音楽があげられている。そして、それらは震災のために作られた曲ではなくても、状況に合わせてDJやリスナーが曲や歌詞を解釈していると考えられる。

4. 大学発の支援活動、そこから見えた学生たちの変化とダンスの可能性

村田 芳子 (筑波大学)

私は被災地の立場から、震災の状況と大学発の支援活動を通して見えてきた学生たちの意識と行動の変化、ダンスの可能性について、その意味と意義を参加者とともに考えていきたい。

私が住む茨城県は、被害が甚大であった東北と比べて陰に隠れがちであるが、海沿いの町では津波の大きな被害があり、内陸においても液状化現象や家屋の倒壊といった様々な被害があった。また、福島に近いことから、原発事故による風評被害も深刻であり、福島から多くの避難者も居住している。

本務校である筑波大学においても、多くの大学施設に被害があり、停電や断水による研究施設や資料の被害は金額には置き換えられない大きな損失を残した。図書館では書棚が全部倒れ、窓ガラスは割れ、復旧に1年かかった。中でも、大学創設当時に建てられた体育施設の被害は大きく、ダンス場がある総合体育館は震災以来使用禁止となり、この春から建て直しの工事が始まっている。現在も、ダンス部の活動やダンスの授業も武道場を借り、不自由な活動を余儀なくされている。

このように、震災による影響を日常生活の中で

身近に感じ、今なお余震が続くつくばであるが、震災以後、大学の教員や学生たちによる被災地への様々な支援の活動が広がっている。その中で、ダンスの活動も、芸術や体育のスタッフとともに、北茨城の子どもや保護者を対象にした活動を展開し、また、鬱などの心の病を抱える被災地の人々を対象としたプロジェクトも計画され、その中でダンスの活動が注目されている。

全学的に様々な復興再生支援プログラムが組まれている中で、最初に始まったプロジェクトは、健康医療、心のケア、特に被災地における児童、生徒を対象としたこころの復興である。その立ちあげのときに、ダンスやアニメーション作りなどをやり、「やはりダンスは体を通しての活動なので、一気に仲良くなれる。コミュニケーションが取れる」と好評であった。北茨城という、津波の被害の大きかったところで、昨年度は3回、2年目になる今年も3回予定されている。

現地でのダンスのプログラムの一部を紹介すると、参加者全員が1つの輪になり手をつないで互いに関わりながら動いたり、2人組で触れ合いながら行うストレッチやリラクゼーション、2人組で交流しあいながらリズムに乗って弾んで踊る活動などを1時間ほどで展開した。男女や親子が一緒に、それから地元のボランティアの人たちも参加している。

こうした震災を通した学生たちの変化であるが、ダンス部の学生は練習場所を奪われる大変な状況で、今までより時間が短くなったけれど、不思議なもので、何か踊りはよくなっているようで、表現することに対してとても謙虚になったと感じている。そして、この震災を通して、「ダンスを踊ること」「作品を作ること」は、「今を生きる」ってことと隣り合っているということ、それが作品や体に正直に投影されていると。その気づきや変化がすごく大きいということを感じた。

ダンスは、いつでも、どこでも、誰とでもできるし、屋外でも屋内でもできる。そして、マイナスをゼロにするという点で治療という意味はあるが、それ以上に踊るということや表現することは、世の中が傾いたときや、ちょっと危ないときほどエネルギーが出てくる。そういうものをダンスは持っていて、ピンチの状況の中でこそ、それが確実に創造的なエネルギーに繋がるといえるところがあると思う。他の方の報告でも「目に見えない」とか「ライブ」とか「効率ではない」ということが挙げられたが、マイナスをゼロにするのではなく、マイナスを一気にプラスにシフトするという、そこがダンスの大きい力ではないかと感じている。

《質疑応答、議論の概要》

4氏の発表の後、フロアと演者との質疑応答、演者同士のやり取り等活発な議論が展開された。

以下、その概要である。

村田：ありがとうございます。4名の方からそれぞれの被災地での興味深い実践の映像や資料を提供していただいて、今回の「震災と舞踊」を考える多くのキーワードが出てきました。では、まずスピーカーの方々への質問などありましたら出していただき、フロアからご意見をいただきたいと思えます。

貫：福島とかでワークショップをなさった時に、子どもたちとか保護者の方たちは、たぶん誰もダンス経験がなかったと思います。先ほど弓削田先生が「最初に緊張をほぐすためにいろんなことをやった」と言われましたが、解きほぐすための工夫はとても大事だと思うんです。その辺の工夫を具体的にお聞きしたいというのが1つ。それから、特に砂連尾さんに質問です。ダウン症の方たちって、すごい表現力を持っていると思うのですが、そういう方と一緒にやったことによって、いわゆる健常者っていわれる人から出てこない発想としてどういうことがあったのかを具体的にお聞きしたいです。

弓削田：私が参加したのは、たくさんプログラムがある中の1つとしてダンスがあったので、参加者は「ダンスをやるよ」と思って来たんじゃないかと、「何かやるんだろ」という感じで来ているだけだと思います。特に大人の方はそうだと思います。だから「子どもだけじゃなく大人も巻き込んでやりましょう」と最初から言ったんです。まず心と体をほぐして、ダンスに興味を持ってもらう。「体を動かして遊びましょう」という遊びとして持っていく。気をつけたのは、互いのコミュニケーションを取るということです。私たちとのコミュニケーションもそうですし、参加者同士も、それから親子のコミュニケーションもよく取るように工夫しました。だからダンスは最後の15分だけですが、やっていたら自然と、いつの間にかダンスになっていたって感じに持っていくようにしていました。でも、みんな一生懸命に踊っていました。郡山の人たちはみんな「ここでしか遊べない」「ここでしか動けない」という部分があって、一生懸命、体を動かします。

村田：私の実践でも、円形になるところから入って、リラクゼーションとかをしながら、いつの間にか弾んで踊っていくという感じにしています。

砂連尾：ダウン症の子たちはリズム感がいいというのは、実際あると思うんですね。特にヒップポップの世界において、ダウン症の子はピークが

20代で、そのピークのときって健常者よりもすごい動きをする人が多いと思う。ただ、僕の関わった2人は20代後半と30代で、1人は聴覚障害があるので「はい、じゃあ何かやって」と僕が言っても、最初15分間は、いつも何もやらずにずっと突っ立ったままの状態でした。そんな拙い状況から始まって、15分ずっと突っ立っていただけの関係が、ワークショップを2年間ぐらいやり続けていると、手をつなぎ合う関係になる。彼らにはある種のすごい運動能力があって、それによって、ものすごく普段とは違う仕草や動きができるっていうことの発見も無くはないんです。でも、もっと繊細なことで、突っ立ったままコミュニケーションを取ろうとしなかったものが動き合うっていう関係になった。僕は、それだけですごいなって思っています。何より彼らの親が、彼らは私たちとは違うスピードで生きてるんだっていう認識になっていることが大きいと思います。

細川：子どもと具体的にどういうことをするのかについて、村田先生の場合、挨拶やしぐさをいれて「それでいいんだ」と言って円になって手を繋いでいました。砂連尾先生の映像にも円になる様子がありましたよね。顔を見合わせて内向きの円になっていくことで、1つの共同体みたいな、その空間の安心感が作られるのだと思います。弓削田先生の報告で、子どもが踊る際に、相手が変わるたびにタッチしながらいろんな人と踊るというのがありました。村田先生も、「崩し」という言葉をよくおっしゃいます。いろんな人と実際に接しながら、動いたり、踊ったり、リズムに乗ったりする空間っていうのが3人の先生方の共通したキーワードになっていて、それによって人の心と体がほぐれていくというようなところがあるんだと感じました。

村田：そう、円に始まって、円で終わるのね。これまでの「個と集団」の考え方は、まず個を充実させてから相手と関わるべきというものでしたが、今の話の個と集団の関係は本質的に違ってきますね。「最初から関わりありき」で、他者との関わりの中で個の違いが際立って行くという関係ですね。その場合、「相手に頼ったっていいじゃない」「そのうちどっちかがなんかしないと」ってあえて求めないと、「いつの間にか自然に」という、その両方の考え方が重要かなと今回の報告を聞いて思いました。だからこういうピンチの時って、もたれていいわけです。

細川：いまケイタケイさんがダウン症の子たちと活動をしていて、「実はダウン症の何とかちゃんに私はかなわない。その子、私の先生なの」っておっしゃっていたことがありました。その何とかちゃんは、ペットボトルを切って、マジックでいろんな絵を描いて、それを山のように作って毎回

稽古場に持ってくるそうです。それ以外に、その子のひらめきとかについてもおっしゃっていました。佐分利先生はそのようなご経験がいろいろあると思うので、何かお聞かせいただければと思います。

佐分利：震災とは関係ないんですけども、10年ぐらい一緒に踊りをしてるダウンの子を助手に連れてワークショップに行くことがあります。その子はダンスの中で習ったことじゃなくて、いろんな生活の中で習ったことをワークショップでよく使ってくれます。踊りでも、自分の気分が悪い日は、まず気分が悪くて埋もれるところから始まって徐々に開いていくんです。さっきも砂連尾先生が言われたのですが、ダウン症の子たちは、その子たちでちゃんとコミュニケーションを取ってます。ダウン症に限らず、いろんな知的障害の子どもはダンスでは対等で、特別っていうことはあまりないかなと思ってます。自己表現という意味で言えば、いろんな生活の場面に「自分は自分でいい」っていうことが連動してくる。

村田：「ダンスは人を選ばない」っていうのでしょうか。それだけ間口が広くて、健常者がなかなか掴めないリアリティとか、ぎりぎりの状態をシンプルに表現する力があるのだと思いますね。

原田：ちょっと違う話題ですが、神戸での大会のテーマのなかに「人は生きるということ。この震災下で、なぜ私は生きるのか、どのように生きるのか」というのがありました。愛媛大の牛山眞貴子先生が、『女子体育』の審査員講評で「踊りによってあなた方は育てられるのよ」って書いておられました。「そのテーマを選んで踊った人の責任とか、踊ったことによって自分のその後の人生が変わる、自分がそれを踊ったっていうことによってあなたが育つんです」っていう言葉に、私はすごく感銘を受けました。舞踊教育をする者として、「どんなテーマを選んでどんなふうに踊るか」じゃなくて、「その子が生きてくその先に、踊りというものがどんなふうに人生に関わっていくのか」っていうことを問われた気がして印象に残っているんです。

砂連尾：でもそれ裏を返すと、ダンスの現場の人って、たぶん今まで、それくらい社会の当事者性を引っ張って来なかったと思うんです。もうそれではやっていけない。いまこれを言ってること自体、すごく遅いなって思うんです。

原田：でも、日本にモダンダンスが登場したころは「天下、国家、自然、宇宙、生命」みたいなものがテーマでした。それが今はどんどん矮小化して「自分の向こう三軒両隣の生活空間の中の問題から、もう一度、いまを生きる自分へ」と目が転じた。それは舞踊が遅れているじゃなくて、時代性ですよ。

砂連尾：重要なのは、音楽の活動を見てもわかるように、発信する力と表現することとをリンクして考えなきゃいけないと思うんですね。

それと、震災というテーマをダンスの作品にすることについても、これだけの大きなことがあったんです。阪神大震災の後も、関西で戯曲家とか育ちましたけど、いま一步ダンスが遅れてるように思う。その中で、いま舞踊で震災というテーマを設定することは、もちろんすごく大きくて重要だった。しかし、もう一步先を見据えて、次はどう発信していくかっていうところを考えたい。音楽って音声などをメディアやネットで流せるっていう良さがあります。でもダンスの場合、そういうものに流すとあんまり伝わらないというか、伝わりにくいと思うんですね。「今日こういうダンスが震災のイベントでありました」という映像を見たんですけど、あんまりぐっと来ないんですよ。だけど音楽って、善し悪しもありますが、ぐっと盛り上げることで一瞬の祝祭性がある。でも、そういう祝祭性はどこまで継続して、社会に対しての問いかけをアクションしていくエネルギーになれてるのかというのをすごく知りたい。そういうアクションを、僕らダンスに携わる者一人ひとりがやっていかないといい感じはしてません。

粟谷：音楽に関して言うと、先ほどの話の60年、70年ぐらいの反戦フォークとか呼ばれてた頃は「社会と私」みたいなテーマがありました。それが90年以降になると「私とあなた」だけの世界になって、歌手とオーディエンス一人ひとりがばらばらになった形で、密室で一對一で向き合うような聴取体験になってきました。坂本龍一のように社会との接点を多く持つてた人たちは、共同体っていうのか、集まるっていう感覚を持ってたと思うんです。リアルとかバーチャルな空間で集まるっていう意識です。

先ほど砂連尾先生がおっしゃられた音楽が一瞬の祝祭性を出すという話は、確かにその通りです。ダンスと音楽について、例えば映像という形になるとしても、ライブとは違った形の結びつきとしての映像っていう方向性があると思います。だから、会場に来て生のライブを楽しむダンスと、映像作品としてライブと結びついたダンスっていう形で、ビデオアーティストの人たちとのコラボレーションのようなものを考えていく方向もあるかなって思います。

石井：今のことと関連して、少し違う観点からの質問です。特に実際に被災地に行った砂連尾さんと弓削田さんに伺いたいのですが、被災地に行ってワークショップとかをやる場合、いきなり行って子どもたちが集まってきて実施するというのではなくて、向こうのNPO法人とか地方自治体の職員を通してやるわけですね。そういった時に、

NPO法人や地方自治体の人とかは、どれほどダンスを通してワークショップをやることに対して理解を持っているのかということが1つ。もう1つは、こちらがやりたいことと彼らが考えていることとの間で、齟齬が生じることがあったかどうか伺いたいです。

弓削田：さっき発表の中でも少しだけ言ったんですけど、行政からは最初のスタートの時は「体を動かせれば何でもいい」と言われました。ただ「屋外じゃなくて屋内でできることをやってください、だから鬼ごっこでも何でもいいです」と。だから、ダンスってことには全く期待してなかったし、「ダンスで何ができるか」ということについてよく分かってなかったと言われていました。やってみたら「ダンスってみんな喜んでるな、すごく楽しそうにやってるな」というのがわかって、少しずつ行政の人の認識が変わってきたというところですね。

石井：じゃあ終わってから、「これからもまた続けて来てほしい」とか言われることは？

村田：「ダンスはこれからも」と必ず言われますね。

弓削田：さらに「こういったダンス教室みたいな単発的なものだけでなく、もう少し発展させて、学校の現場とか幼稚園の現場で使えるような、普段からダンスに親しめるような環境を作っていくので協力してください」ということも言われました。去年やったダンス教室っていう単発的な活動がきっかけになったんじゃないかなとは思っていますね。

砂連尾：今回の映像にあった現代的なリズム、ヒップホップなんかにしても、ヒップホップっていうのは、もともとアメリカのストリートから生まれたものです。でもいまメディアでいちばん流通してるので親が安心する。行政とか学校って、親が安心するものをやるんです。

弓削田：広報に載せるときに「ヒップホップを踊りましょう」とみたいな感じになることが結構あります。こちらは「ヒップホップじゃないですよ」と言っただけで「でも、ヒップホップにすると人が集まる」とみたいな。

村田：今年度から中学校でのダンスの必修化が始まりましたが、マスコミの伝え方がとても偏っています。ダンスの内容は、創作ダンスと現代的なリズムのダンスとフォークダンスの3つであるのに、リズムの中の1つだけを取り上げた報道になっている。私たちが「世間一般での、社会での舞踊の役割を考えよう」と言いながらも、社会での認知度とかイメージされているものと、私たちが実際にやっているものとの間にズレがある。そこを「そうじゃないよ」と発信もしていかなければならないと痛感しています。社会から望ま

れているのと私たちがやろうとしているものとがずれていたりしますよね。

砂連尾：そのことをどう広げていくかは、非常に計算する必要もあるだろうし、ネゴシエーションしていく必要はあるなって。そこら辺のことを、どうやって今回の運動の中に自覚的に盛り込んでいくかということは非常に重要です。現場の先生と対立しそうになったときは、舞踊家だけじゃなくて、最近では、臨床哲学者や言葉の強い人を同行させます。そういう人を同行させるっていうのは、有効な方法の1つと思います。

粟谷：たとえば「つづら折りの宴」を主催したソールフラワーユニオンは反原発の活動なんかもしていて、メジャーとは契約を切られてインディーズでやっているような人たちです。音楽と震災の話で言いますと、彼らの場合、震災関連のコンサートなどでメディアに映っている部分と、一方で、サウンドデモをやっている部分とがあるんです。先ほど砂連尾先生がおっしゃっていた2本の話ですね。だから体制に関しては、まずダンスの重要性を国レベルで、法で認めさせてやると。

村田：粟谷先生がいま言われた「ダンスを認知させていくにはそのための動きもしなきゃいけないけれど、そこでダンス本来の姿というものを見失わないでしていく時、いつも反対側のもう1つを考えるとかなきゃいけない」という言葉は、私たちへの大きな宿題だと思います。

尼ヶ崎：だいたい芸術っていうのは昔から役に立たないから、「お前まだやってるのか」とか言われてきたんですね。そこで「いや、こういうことの役に立ちます」と言い訳をしてきたのですが、近代になって「いや、役に立たなくていいんだ、もう芸術のための芸術で、我々は役に立たないことをやってる」と居直って、近代芸術が始まったわけですね。ところがこの震災以降、音楽も舞踊も、いろんな分野の芸術は全部、何か役に立つことをやろう、やらなきゃいけない、という雰囲気になってきてしまった。まあ実際、役に立つわけで、それはとても素晴らしいことですがそれだけでいいのかなと。それに対して、砂連尾さんがちょっと踏み止まってるところがあって、それがやっぱり必要だという気がします。

砂連尾：いまダンスを薦めてるのは、実は文科省より経産省なんです。それは、今の子どもたちが日本語じゃだめだから、ボディランゲージをちゃんとできるようにしようっていう。その辺のことをちゃんと踏まえて、でも、それは利用すべきだと思っています。その中で、ダンスがどういうふうになら文化とか経済になっていくかには気を付けなきゃいけないと思う。そこでその流れを利用しながらどうするかについては、この震災で、「役に立つことには需要があるんだ」というふう

うにやっていく必要があるのかなと思います。

村田：これまで舞踊に対しては世間からの無関心という状態が長く続いていました。でも砂連尾先生が最後に言われた「ある種の関心」を持ってもらえるだけでも、すごく変わってきたと思います。利用もしていくし、利用もされない、役に立つことも考えるし、役に立たないってことも考えるという、その2つの頃合いが重要だと感じました。

古井戸：どうも、ありがとうございます。こういうラウンドテーブルっていうのは初めてですけども、いいですね。問題がたくさん出て。丸くなるっていうのは、いろんな効果がありますね。今回、阪神淡路大震災のことも出ましたが、そこでボランティア問題を中心として、初めて学問だとかそういうものの組に乗ったんです。それ以前は震災が起こっても忘れていったけれども、それが過去の記録として現在まで語り継がれるようになったのは、やっぱり阪神淡路の教訓だと思います。今度の震災もたぶんそうだと思うんです。そのときに、2つ忘れていけないことがあります。1つは、いつまでもやっぱり傷は消えない、でも、それはマイナスなんじゃなくて、村田さんが言うように、いい作品が生まれたり、それまで気づかなかった何かが自分の中に生まれたりする。だからマイナス面とプラス面をちゃんと見なきゃいけないということです。もう1つは、これは日本舞踊家もそうで、震災の前に行った学校の子どもたちから手紙が来て、僕に来てくれて頼まれ、日本舞踊協会で特別にプログラムを作ってから行ったんです。そうすると、帰ってきた人たちは「大変だった、大変だった」と言うけれども、もう見るからに違う。だから、何か人を変えるという前に、自分たちがまず変われるという、そういうのも今回はすごく強く感じました。

村田：古井戸会長にまとめていただきました。ではこれで、ラウンドテーブルを終わりたいと思います。スピーカーの皆さん、ありがとうございます。

*なお、本ラウンドテーブルの記録は、立命館大学の相原進氏にご協力をいただきました。

(文責 村田芳子)